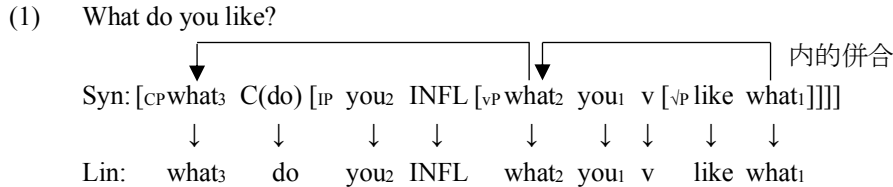


ボックス理論に基づく転移現象の線形化*

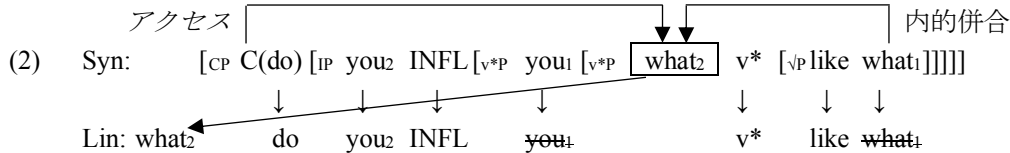
齋藤章吾

1. 導入

本研究は、転移現象に対して、Chomsky (2023)の提案するボックス理論に基づく線形化プロセスを提案する。転移現象とは、(1)の wh 疑問文のように、発音位置と解釈位置がずれる現象である((1)の wh 疑問文では、wh 句が節頭で発音される一方で、内項位置の解釈を持っている)。この現象は、従来、「wh 句が内項の位置に外的併合(EM)された後、節頭に対応する統語構造上の位置へ(連続循環的に)内的併合(IM)される(そして、その位置で具現化される)」と分析されてきた。(これ以降の図では、コピーの識別のために番号を付している。)



一方、ボックス理論では「wh 句が直近のフェイズの端まで IM の適用を受けると『ボックス』と呼ばれる領域に入り、その後に節領域のフェイズ主要部からのアクセスを通して節頭に具現化される」と分析されている。



ボックス理論は統語部門の簡潔化に貢献するものの、この理論のもとでの外在化プロセスは明確にされていない。本研究は、ボックス理論の枠組みにおける線形化プロセスを提案する。

2. 提案と分析

本節ではボックス理論に基づく線形化プロセスを提案し、分析を示す。

まず、本研究では、線形化が(3)の線形化原理に基づいて行われると仮定する。

(3) 2項関係にある要素どうしを隣接させよ。

(3)に基づく、統語部門における2項関係が、線形化の部門では隣接関係として写像される。本研究では、wh 移動の線形化の計算に関わる入力として、(4)に示す2項関係を仮定する。¹

- (4) a. 併合関係 (ボックス以外) → 基底構造の線形化
b. 一致関係 → 一致を伴う転移の線形化

(3-4)に基づく、異なる2項関係に基づく複数の線形順序が得られる。例えば、(1)の wh 疑問文は(5a)の構造を持ち、(5b, c)の線形順序を得る。(これ以降の図において、A < B は「A が B に先行する」ことを意味する。なお、(5)では、Chomsky (2023)に基づいてボックス化を伴わない A 移動が起こると分析しているが、A 移動に対しては次のページで異なる分析を示す。)

- (5) a. 統語構造 : [CP C_[Q] [IP you₂ INFL [v*_P you₁ [v*_P what_{[Q]2}] v* [v_P like what_{[Q]1}]]]]
b. 併合関係 : C < you₂ < INFL < you₁ < v* < like < what₁
c. 一致 (Q) : what₂ < C (※what と C の語順は Richards (2016)の Contiguity 理論に基づいている。)

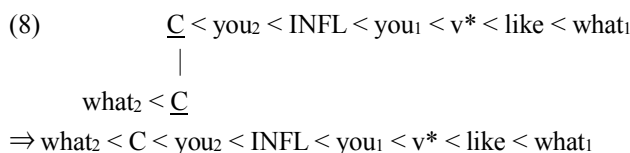
本研究では、複数の線形順序が(6)の複合プロセスに基づき1つにまとめられると仮定する。

(6) 異なる2項関係に基づく異なる線形順序は共通要素を軸にして複合される。

(6)に基づく、(5b, c)の線形順序は、共通要素の what と C のいずれかを軸にして複合される。また、本研究では、線形順序の複合が(7)の原理に従うものと仮定する。

(7) 解釈位置と発音位置は合致することが望ましい。(cf. Williams (2003), Bobaljik and Wurmbrand (2012))

(7)に基づく、文全体に wh-scope をとる wh 句は、文全体を作用域に収める位置と合致する節頭の位置(作用域の外側の位置)に複合される。その結果、(8)のように線形順序の複合が起こる。



(8)の複合の出力として得られた線形順序は wh 句のコピーを 2 つ含むが、「発音を限りなく少なくせよ」という経済性条件に基づき、一方のコピーのみが発音されて他方は削除される。本研究では、コピーの具現化と削除は、最適性理論の枠組みのもと、外在化に課せられる制約を優先度の高いものから最も多く満たすようにして適用されると仮定する。具体的に wh 疑問文に関しては、2 項関係に基づく線形化の要求が制約として働き、かつ、併合関係に基づく線形化の制約と一致関係に基づく線形化の制約が(9)に示す優先順位の関係にあると仮定する。(A >> B は「A が B より優先順位が高い」ことを表す。)

(9) 一致関係に基づく線形化 (Lin_{Agr}) >> 併合関係に基づく線形化 (Lin_{Merge})

(9)に基づく、コピー削除を伴う出力は(10)のように評価され、節頭のコピーが具現化される出力が選ばれる。

(10)		Lin _{Agr} >> Lin _{Merge}
	what ₂ < C < you ₂ < INFL < you ₁ < v* < like < what ₁	*!
	☞ what ₂ < C < you ₂ < INFL < you ₁ < v* < like < what ₁	*

⇒ what₂ < C < you₂ < INFL < you₁ < v* < like < what₁ (What do you like?)

本研究の提案は、wh 疑問文の転移現象だけでなく、A 移動にも拡張できる。²(11)の文(外項の A 移動を含む文)は、(12a)の統語構造を持ち、(12b, c)の線形順序を得ると分析される。

(11) You will study syntax.

(12) a. 統語構造 : [CP C [IP INFL_[φ]-will [v*P you_[φ] [v*P v* [vP study syntax]]]]]

b. 併合関係 : C < INFL-will < you < v* < study < syntax

c. 一致 (φ) : you < INFL-will

(※you と INFL-will の語順は Richards (2016)の Affix Support に基づいている。)

(12b, c)の線形順序は、共通要素の you または INFL を軸にして複合される。ここでは、いわゆる INFL 指定部が外項の存在前提解釈などと関係する位置であるという分析のもと(cf. Chomsky (2021)), 解釈位置と発音位置が合致するように INFL を軸にして線形順序の複合が行われると分析する。その結果、いわゆる INFL 指定部の位置に主語 you が具現化される線形順序が得られる。

(13) C < INFL-will < you < v* < study < syntax

↓
you < INFL-will

⇒ C < you < INFL-will < you < v* < study < syntax

コピー削除を伴う出力は(14)のように評価され、適切な線形順序が得られる。

(14)		Lin _{Agr} >> Lin _{Merge}
	C < you < INFL < you < v* < study < syntax	*!
	☞ C < you < INFL < you < v* < study < syntax	*

⇒ C < you < INFL-will < you < v* < study < syntax (You will study syntax.)

注釈

*本研究は JSPS 科研費 JP21K13026 の助成を受けている。

- 併合関係に基づく線形化は Kayne (1994)などを、一致に基づく線形化は Agbayani (2000)などを参照。
- スペースの都合上本稿では省くが、本研究では本稿の提案が、情報構造関係(e.g. Topic-Comment/Focus-Background)に基づく転移現象(話題化や重名詞句移動)や、主要部どうしの選択関係に基づく主要部移動などにも拡張可能と考えている。情報構造に基づく線形化は Williams (2003), Bobaljik and Wurmbrand (2012)などを、主要部の選択関係に基づく線形化は Embick and Noyer (2001)などを参照。

参考文献

- Agbayani, Brian (2000) “Wh-Subjects in English and the Vacuous Movement Hypothesis,” *Linguistic Inquiry* 31, 703-713.
/ Bobaljik, Jonathan David and Susi Wurmbrand (2012) “Word Order and Scope: Transparent Interfaces and the 3/4 Signature,” *Linguistic Inquiry* 43, 371-421. / Chomsky, Noam (2021) “Minimalism: Where Are We Now, and Where Can We Hope to Go,” *Gengo Kenkyu* 160, 1-41. / Chomsky, Noam (2023) “The Miracle Creed and SMT,” ms., University of Arizona; MIT. / Embick, David and Rolf Noyer (2001) “Movement Operations after Syntax,” *Linguistic Inquiry* 32, 555-595. / Kayne, Richard S. (1994) *The Antisymmetry of Syntax*, MIT Press, Cambridge, MA. / Richards, Norvin (2016) *Contiguity Theory*, MIT Press, Cambridge. / Williams, Edwin (2003) *Representation Theory*, MIT Press, Cambridge, MA.